

学生宣教の今日的意義

キリスト者学生会：KGK 東海地区主事

吉澤慎也

はじめに

筆者はキリスト者学生会（以下KGKと略）の東海地区主事として、学生宣教の働きに携わっている者である。KGKの対象としている学生とは、主に大学生であり、それ以外にも専門学校生・短期大学生・大学院生などを含む。いわゆる高等教育機関に通っていたり、専門技術を学んでいたりする青年たちのことである。年齢的には10代後半から20代前半までの期間となる¹。この小論文では、そのような学生たちの中でも、特に筆者が日々関わっているキリスト者学生たちにスポットを当て、学生宣教の今日的意義について述べることを目的とする。

1. 若いキリスト者に見られる二元論的傾向

① 若いキリスト者に見られる二元論的傾向

筆者はKGKのキリスト者学生をはじめとして、キャンプで出会う中高生など、若いキリスト者に関わる機会が比較的多い。彼らとの関わりを通して思わされていることは、彼らの中に以下に示すような二元論的傾向が見られるということである²。

- 聖書の教える内容について肯定的な態度を示すが、それについてあまりよく知らなかったり、それが具体的な現実生活のあり方（例えば人間関係の持ち方や恋愛・性のあり方、勉強に対する態度など）と結び付けられていなかったりする。
- キリスト教や教会に関する事柄と世に関する事柄とが一意識的にせよ無意識的にせよ一、分離されて理解されており、二元的に捉えられている。
- 理想のキリスト者像が非日常的な（例えばキャンプや賛美集会などで目にした姿や、奉仕をたくさんしている姿など）、抽象的で漠然とした（熱い、すごいなど）ものとしてイメージされがちである。

このような二元論的傾向が若いキリスト者全般に見られる、というわけでは決してない。個人差もそれなりにある。ユース世代のキリスト者はみなこうだ、と決め付けるような態度は乱暴で危険である。しかしながら、一部の若いキリスト者たちには確かにこのような傾向が見出せるように感じている。そして彼らは、自らのこのような態度につい

¹ 『文部科学省 平成23年度 学校基本調査』によると、2011年新規高卒者の大学(学部)進学率は47.6%、専門学校進学率は16.2%、短期大学進学率は5.8%となっている。したがって、同じ年代の青年のうち約10人に7人はKGKの対象としている「学生」ということになる。

² より広範な「現代若者論」としては、高木実「『現代学生に届く伝道』の模索」『生きることはキリスト KGK60周年記念誌』（キリスト者学生会、2008年、p.10-50）を参照されたい。

て無自覚で、あまり問題意識を持っていない場合が少なくない。筆者のこれまでの経験から、このような若いクリスチャンたちは、高校を卒業し、学生時代を過ごす中で、自らの信仰のあり方についてより自覚的になっていくケースが多いように思う。

② 成育過程での社会環境からの影響

どうしてこのような二元論的傾向を持つようになるのか、大雑把になるが少し考察してみたい。

筆者の関わっているクリスチャン学生の中には、親がクリスチャンで幼い頃から教会に通ってきたという学生が少なくない³。彼らはそれまでの成育過程において、教会やクリスチャンの家族から多くの影響を受けてきている。しかし一方で、学校やメディアなど現代日本の社会環境からも多大な影響を受けてきたことは容易に想像できる⁴。彼らはそれまでの成育過程において、教会・家庭・学校など、所属する共同体によって考え方や価値観が異なることに戸惑いを感じながらも⁵、それぞれの共同体の中で上手に生きていく術を自然と身に付けてきたように思える。そしてその過程で、教会とこの世という二元論的思考になったり、聖書の教えを観念的なものとして受け止めるようになってきたのかもしれない。教会に同年代の友人が少ないような場合には、彼らにとっての教会生活のリアリティとは「日曜日に教会に行くこと」の他、「適当な時期にバプテスマを受けること」「休みに教会のキャンプに参加すること」くらいしかなかったのかもしれない、次第に教会やキリスト教というものが非日常の出来事へと追いやられてしまった、ということはあるであろう。（しかしそれでも彼らは、筆者と関わりを持つ年代に至るまで何らかの形で教会につながってきたのである。そのことを感謝して受け止めたいと思わされる。）

このように、成育過程における社会環境からの影響により、彼らが二元論的傾向を持つようになっていったのではないかとまずは推測される。

③ 日本の福音派教会の非社会的体質

また、このような二元論的傾向の発達する温床として、日本の福音派教会の非社会的体

³ 例えば2012年3月に行われたKGK 東海地区の春期学校に参加したクリスチャン学生のうち8割以上が、両親もしくは片親がクリスチャンという家庭環境で育ったという自覚を持っている（ただし教会に通い始めた時期はそれぞれ異なる）。

⁴ 杉本玲子は「現代日本における青少年の宗教観と青少年伝道・育成に関する一考察」『RAC ジャーナル 第6号』（RAC ネットワーク、2000年）において、「教会における青少年への教育の中心が聖書であるべきことは当然であるが、聖書の教える内容が彼らの現実生活から切り離されているようであってはならない。クリスチャンホームの子どもたちでさえ、集まって「学校の怪談」の話をしてしまうような現在、聖書を学ぶだけでは、実際生活の中で神を信じて従っていくことはできない。」(p.326)と述べ、教会で育った子どもたちがオカルトや呪術などの影響を大きく受けている現実を憂慮し、それに対する教会教育のあり方について論じている。

⁵ 筆者の関わっているクリスチャンホーム出身の学生たちの中には、教会と家庭における親の態度の違いに葛藤を覚えた経験を持つ者が決して少なくない。

質があるようにも筆者は考えている。戦後日本の福音派教会は、伝道には熱心であったが非社会的・非歴史的な傾向が強かったと言われる⁶⁷。ローザンヌ誓約を一つの契機として今ではそのような傾向は少なくなってきたと考えられるが、しかし教会の中には未だ個人主義と霊肉二元論が根強く残っていると指摘もある⁸。教会の非社会的体質と、先に挙げた若いクリスチャンに見られる二元論的傾向とは、深いところで根を同じくする部分もあるのではないかと筆者は考えている。福音のことに社会のことに二元的に考える体質が教会にある時、そのような教会で育ってきたクリスチャンにおいては、同質の思考がそれぞれの形において顕現してくると言えるのではないだろうか。

④ 最近の青年宣教の取り組み

最近、日本の教会では若者伝道とか青年伝道と呼ばれるものに対する関心が高くなってきているように感じている⁹。例えば、教団教派レベルで中高生の全国集会などが開催されるようになったり、ユースミニストリーという言葉がより頻繁に聞かれるようになったりしている。あるいは地域レベルでの青年宣教の取り組みも増えてきているように思う¹⁰。このように若い人たちへの宣教に対する関心が高まっていることは、KGK主事である筆者にとっては大変嬉しいことである。

筆者は現在、日本福音キリスト教会連合（以下 JECA と略）の中部地区に属する教会に出席している。この JECA 中部地区では、いわゆる教団レベルで中高生のためのミニストリーが活発に展開されている。春と夏にはキャンプを行い、それ以外にも定期的に中

⁶ 宇田進『福音主義キリスト教と福音派』（いのちのことば社、1984年、p.186-187）や泉田昭「日本の福音派―戦後43年の歩み―」『日本の福音派』（日本福音同盟、1989年、p.33）など。

⁷ そもそもこのような教会の非社会的体質は、日本においては戦前から既に存在していたものでもある。戦時下の教会の罪責を自覚・反省していく中で、その原因の一つとして日本の教会に非社会的体質があったことが1950年代から明らかにされてきた。「戦時下の教会の問題点は、社会に対する認識の欠如からくる二元論であった。社会認識の欠如が、戦争の問題に対する教会の態度が本当に福音と調和されていなかったことの大きな原因であり、信仰の純粋性を保つということが非常に中心的な事柄となってしまい、政治の問題などには教会は関わるべきではない、という考えが戦時下の大体の教会を占めていた。福音的な良心で政治の問題に触れていくという土台がそこにはなかった。」柏井光蔵「太平洋戦争における教会の戦争責任をめぐって1」『福音と世界 1959.11』（新教出版社、p.58-71）など。

⁸ 後藤敏夫『改訂新版 終末を生きる神の民』（いのちのことば社、2007年）は、このような問題意識から書かれた優れた著作である。「私は、個人倫理的に内面の聖さを強調する敬虔主義の伝統に育ちました。ある意味では、敬虔主義の伝統の大切さを今ほど痛感することはありません。ただそういう中で、罪とその支配を自分の心の内に見るだけでなく、私もその一員である社会の構造の中にも見ること、また聖霊による聖めを個人の内面において求めるだけでなく、政治的、経済的その他の社会的関係の中においても求めることが、私の課題であり続けています。」(p.7)

⁹ 2003年夏に開催された JEA 世界宣教青年大会「すつと青山」が一つの契機となっていると考えられる。

¹⁰ 筆者の担当している東海地区では、名古屋・浜松・静岡などの都市部で若者向けの賛美集会などがしばしば行われるようになってきている。このような集会は教団教派を超えた超教派のものとして行われることが多い。2009年に札幌で開催された JEA の第五回日本伝道会議を契機とした地域レベルにおける宣教協力の実践と言えよう。

高生向けの集会を行っている。筆者の出席教会では、2010年度に4人、2011年度にも4人の中高生が受洗に導かれたが、彼らの信仰が育まれていく過程で JECA 中部地区の活動から良い影響を受けてきたことは疑い得ない。このような例からも、各教団教派で、あるいは地域レベルで行われている様々な青年宣教の取り組みは、概して高く評価されるべきだと筆者は考えている。

しかしながら、一方でこのような活動には弱さもある。それはキャンプや賛美集会などの持つ非日常性である。いずれも一時的なものであり、日常生活と不連続な性格を持つことは否めない。キャンプに行くとその時は気持ちが盛り上がるが、そこから帰ってしばらくすると元に戻ってしまうというような経験は、多くのクリスチャン学生にとって共通のものであり、筆者はそのような話を幾度となく聞いてきた。非日常的なイベントなどで燃やされた思いを、日常の信仰生活の中で継続的に実践していくためには、それなりの工夫や取り組みが必要なのにも感じている。

⑤ 統合に向けて

中高生まではこのような非日常的な取り組みの中で自覚的な信仰が発露する機会が少なくないことを考えると、その後の歩みのどこかで、それが現実社会における日常的な歩みと結び付き一元的に統合されていく必要があるだろう。そしてそのような統合の作業がなされる機会として、学生時代があるのではないかと筆者は考える。それまでの歩みの中で、断片的・部分的に理解されてきたり、あるいは二元論的に受け止められてきたりする信仰の事柄を、よりホーリスティックに統合するという作業は、学生時代におけるクリスチャン学生の発達課題とも言える大切な営みなのではないだろうか。

2. 学生宣教の今日的意義

① 「純粋な信仰」(Ⅱテモテ 1:5)

「私はあなたの純粋な信仰を思い起こしています。そのような信仰は、最初あなたの祖母ロイスと、あなたの母ユニケのうちに宿ったものですが、それがあなたのうちにも宿っていることを、私は確信しています。」Ⅱテモテ 1:5

ここでパウロはテモテの信仰を「純粋な信仰」と表している。そしてその「純粋な信仰」が、テモテの祖母ロイスと母ユニケから継承されたものであることをうかがわせる¹¹。テモテは異教の地ルステラの出身でギリシヤ人を父親としていたが¹²、祖母や母を通して幼

¹¹ ロイスやユニケの信仰がユダヤ教信仰のことなのかそれともキリスト教信仰のことなのか、という議論はある。

¹² 使徒 16:1「それからパウロはデルベに、次いでルステラに行った。そこにテモテという弟子がいた。信者であるユダヤ婦人の子で、ギリシヤ人を父としていたが、」このテモテの父親がクリスチャンであったかどうかははっきりしない。

い頃よりキリスト教教育と訓練とを受けて育ったと考えられる¹³。このようなテモテの生育環境を考えると、日本で育つクリスチャンとも共通の部分があると言えるのではないだろうか。

「純粋な」と訳された言葉はἀνυπόκριτοςであり、他の箇所¹⁴では「偽りのない」と訳されることが多い言葉である¹⁵。牧会書簡が偽教師に対する励ましを目的として執筆されたことを考えると、この「純真な信仰」とはまず正統的なキリスト教信仰、すなわち教理的な正しさを意味している。けれども文脈からは¹⁶、単なる教理的な正しさだけではなく、その信仰が宗教感情を伴った真心から出たものであることも読み取れる¹⁷。つまりここで言われているテモテの「純粋な信仰」とは、教理的な正しさと共に生活態度や感情とが真に統合された裏表のない信仰的態度のことであろう¹⁸。そしてこのような「純粋な信仰」を、私たち日本の教会も次世代へと継承していくべき一つの信仰のモデルとして考えても良いのではないだろうか。

② クリスチャン学生にとっての学生時代

KGK はこれまでの60 数年の歴史の中で、ずっと学生のみにも焦点を当ててきた。それはやはり、この10 代後半から20 代前半という年代の学生たちに聖書の御言葉を宣教することにこそ大きな意義を見出してきたからである。クリスチャン学生にとっての学生時代というのは、先に見たように信仰が純粋なものとして真に統合されていくために最良の時期であると考えられる。

以前、高校生伝道に携わっているある伝道者の方と興味深い意見交換をしたことがあった。KGKで行われる夏期学校や春期学校に参加したクリスチャン学生たちに、アンケートなどを通して「最も良かったプログラムは何か」を尋ねてみると、しばしば「静思の時」

¹³ IIテモテ3:14,15「あなたは自分が、どの人たちからそれを学んだかを知っており、また、幼いころから聖書に親しんで来たことを知っているからです。」

¹⁴ 新約聖書に6回出てくる。その中でもIテモテ1:5に全く同じ表現があり、そこでは「偽りのない信仰」と訳されている。

¹⁵ 新共同訳では「純真な」と訳されている。

¹⁶ IIテモテ1:3「きよい良心」、IIテモテ1:4「あなたの涙」など。

¹⁷ ドナルド・ガスリー『ティンデル聖書注解 テモテへの手紙、テトスへの手紙』（村井優人訳、いのちのことば社、2006年）を参照。

¹⁸ D・M・ロイドジョンスは『霊的スランプ—信仰の回復』（石黒則年訳、聖書図書刊行会、1983年）の中でローマ6:17,18「神に感謝すべきことには、あなたがたは、もとは罪の奴隷でしたが、伝えられた教えの規準に心から服従し、罪から解放されて、義の奴隷となったのです。」から健全な信仰のための統一性を主張している。「ここでパウロが強調しているポイントは、クリスチャン生活全体の統一性、つまり信仰生活のバランスである。それは「服従した」生活である—ここに意志がある。「心から」—ここに感情、情緒がある。「教えの規準」は思考力、つまり知性に関係がある。クリスチャンを描写することにおいてパウロが強調しているのは、生活全体が健全に統一されているということである。人間には知性と感情と意志とが備わっている。そして、霊的スランプの一般的な原因は、クリスチャン生活が統一性のある生活全体であり、調和のとれた生活全体であることを認めないことにある。この統一性の欠如は、クリスチャン生活における苦悶と違和感と動揺の最も大きな原因の一つである。」(p.86-87)

という答えが返ってくるが¹⁹、そのような回答は高校生ではほとんど見られないと言うのだ。このことはつまり、どちらが良いとか悪いとかいうことではなく、それぞれの年齢に応じた霊性のあり方、ふさわしい信仰のスタイルがあるということを示唆しているのではないだろうか。そしてクリスチャン学生にとっての学生時代とは、それまでの信仰のあり方を引き継ぎながらも、さらに静まることや人格的な関係といったより深みのある霊性にも価値を見出すようになる大切な時期であると言える。

青年期の発達課題として広く一般に認められていることは、アイデンティティの確立ということである。つまり青年期になると「自分とは何か」とか「生きる意味は何か」を問いかけるようになる。そして生きる意味を問いながら将来の目標を見つけ、「私とは何か」という問いに自分なりの答えを見つけていく。それが青年期の内面的な発達課題と言われる²⁰。このことはクリスチャン学生にとっては、クリスチャンとしての自分とは何か、という問いに他ならない。そしてその問いに答えるためには、これまでの親との関係や教会でのあり方を見直し、それを再編成していくような作業が必要となる。そして学生時代こそが、その作業をするのにふさわしい時期であると筆者は考える²¹。

けれども一方で、学生時代とは信仰の分岐点とも呼べるような危うい時期とも言えよう。信仰が統合されて神にますます深く結びついて行く可能性がある一方で、その逆に信仰がますます二元的に分離され、形式的・観念的になり、あるいは教会から離れてしまう可能性もまた多分にあると考えられるからである。

例えば学生時代には、異性を好きになったり交際したりする経験が日常的にあり得る。また性に関する課題が実に身近に存在する。そこで聖書的な恋愛観や結婚観を学びそれを受け止めていくことで、信仰が適切に統合されていく機会となり得る一方で、逆にますます

¹⁹ こういう回答は決して珍しくなく、むしろ多いとも言える。静まって神様と一対一で交わりを持ってたことが本当に良かったという感想を持つ学生は少なくない。また最近の傾向では、最も良かったプログラムとしてグループタイムなどの交わりの時間を挙げる学生が多い。

²⁰ 同様に「自我の解体と再編成」について言われている。「青年期は、これまでの自分を解体し、新しい自分を築こうと試みる。これを自我の解体と再編成という。それはこれまでの周りとの関係をくずし、新しい関係を築こうとすることによって行われる。自我の解体と再編成は、象徴的な意味では、今までの自分が一度死んで、再び生まれかわることといえる。これは「死と再生」と呼ばれてきた。」白井利明『大人へのなりかた―青年心理学の視点から』（新日本出版社、2003年、p.17-19）

²¹ 小林基人は「学生伝道の意義」『主が建てるのでなければ』（キリスト者学生会、1987年）の中で次のように述べている。「しかし「自己確立」ということにおいて、大学生は中高生と区別される。日本の教会の教育制度では、高校生までは受験勉強に追われ、大学に入ってからようやく自分自身についてゆっくりと考える時間をもつことができる。…（中略）…。この自己確立の時期は、小中学生の頃のように、成績優秀・品行方正という他人からの良い評価を求める時期ではない。むしろ自分の内側を見つめる深さの時代である。自分の罪の現実におのき、それゆえに神の恵みの福音に出会うのである。たとい小さい頃から教会学校に通っていても、クリスチャン・ホームに育てられたとしても、この自己確立の時期にもう一度「十字架はこの私のためであった」という福音の再確認がなくてはならないと私は信じる。ひとりの人生の中にも、「宗教改革」が繰り返され、信仰がたましいに深く根をおろしていく。この深さのレベルへの信仰の進展は、大学生伝道の目的でもあり、必要でもあると確信する。すなわち、大学生伝道を大学生の外側からではなく、その人格という内側から意義づけることが大切であると考ええる。」（p.43,44）

す二元的に分離していく危険性もある。恋愛や性といった具体的な事柄は学生にとってはまさにそれぞれが現実であって、観念的なものとしては捉え難い。中立的な態度を許さない切実さがそこにはあり、統合に向かうか、分離に向かうか、まさに信仰が試される分岐点のようなものである。他にも、基本的に無神論的立場を前提としている学問をどのような態度で学ぶか、仕事や就職というものをどのように考えるかなど、同様に信仰の分岐点となり得る課題が学生時代には日常的に存在する。そしてその時の学生時代の姿勢が、その後の信仰のあり方や靈性というものを決定していく可能性があると言っても過言ではない。クリスチャン学生にとっての学生時代とは、そのように非常に重要な時期なのである。

③ KGKの取り組み²²

KGKでは、大学内でクリスチャン学生たちが自主的なグループを作って活動することを提唱してきた。活動内容としては、祈り会や聖書研究が主なものである。この自主グループ活動の特徴の一つは、それが日常的かつ主体的な取り組みであるということである。つまりクリスチャン学生たちが日曜日ではない平日に学内で集まって、自分から聖書を開き、交わりを持って祈るのである²³。このような活動に関わることで、学生たちは自分が生活する場で主を礼拝することの意味を問われ、信仰をよりホーリスティックに捉え直す機会が与えられる。

またKGKでは静思の時を大切にしてきた。これはいわゆるデボーション・QTとも呼ばれるもので、毎日聖書を読み、祈り、神との交わりを持つことである。これもまた一時的ではない日常そのものの信仰の歩みと言えるだろう。他にも、全生活を通して証をすることや強調してきた²⁴。クリスチャンとしての生活・生き方そのものが証であり、まさに日常生活そのものがキリストの証人としての歩みであるという理解である。KGKではこのようにクリスチャン学生の生活の現場そのものが運動の中心的要素となるのであり、そこにおいてこそ献身することを励ましてきた。こういう日常的な取り組みが、日々信仰

²² ここに紹介する取り組みは、最近のクリスチャン学生の課題を鑑みて始めたというものではない。KGKではむしろはじめからこのような活動を展開してきた。KGKの源流を辿って行くと、19世紀の福音主義学生運動に行き着く。丸山忠孝「19世紀の福音主義学生運動について」『主が建てるのでなければ』（キリスト者学生会、1987年）を参照されたい。

²³ このような活動はあくまでも主日礼拝を前提としている。メンバーの一人ひとりが自分の教会を大切に、そこで礼拝を守り、そしてキリストのからだの一部として自分の学校に神様から遣わされているという「派遣意識」を持って活動をしている。KGK運動は学生社会における諸教会の宣教協力が具現化された証である。

²⁴ 1989年のマニラ宣言・Bすべての教会・(7)ひたすらなあかし「生まれ変わった生活そのもの以上に、福音を伝えるための雄弁はない。また、言動不一致のあかしほど信用を落すものはない。私たちはキリストの福音にふさわしく生きるように召されおり、その香りを放つようにとすら召されているのである。聖い生活によって、福音の美しさは輝きを増すのである。キリストの弟子たちが宣べ伝えた福音の内容が具体的に見えるようにと世の中の人々は求めている。その際の最も強いあかしは、私たちのひたむきな姿勢である。」にも通じるものである。

の分岐点に立たされている学生にとって、その信仰が統合され一元化されていくために大きな意味があると筆者は信じている。

またKGKでは、クリスチャン学生たちが聖書的世界観を有し、信仰告白の証として歴史社会に参与することを励ますために、聖書に啓示された救いの全体像を学ぶ機会を提供している²⁵。創造・墮落・贖罪・終末という聖書のフレームワークに沿って神の救済史全体を学ぶことで、この世における教会やクリスチャンの使命が明らかにされ、神の国の福音に生きる者としてより成熟していくことを期待している。

そのように成長していく一人ひとは、真に教会に仕え、教会を建て上げるという神の御心をなす者となるであろう。かつてKGK主事でもあったマイケル・グリフィスは、学生宣教団体の目指すべき方向性は教会を建て上げることにあると述べている²⁶。

おわりに

私たちが神の恵みを本当に理解した時には、その当然の結果として福音は実を結び広がり続けるものである²⁷。クリスチャン学生が、神の恵みを本当に理解し、神の国の福音を証する者として遣わされ、その生きた証によってさらに福音が実を結び広がり続けていくように。そして教会を建て上げる者として、ますます整えられていくようにと、心から願っている。

²⁵ 全国リーダー訓練会など。

²⁶ 「学生の組織は、それ自体が究極の目的となることはなく、教会のための組織となるべきである、と私は口をすっぱくしていいたいのです。学生は学内伝道で教会員の数をふやします。また学内で、いろいろな奉仕ができるように会員を訓練します。しかしそれは、教会で、生涯にわたる奉仕をする準備のためなのです。四年前後の学生生活は、キリストに仕える全生涯にくらべると、つかの間のことです。学内グループを長期的な目でみると、その有効性は、集会につどう人の数や回心者数によってではなく、学生が卒業し資格を得たのち、聖書研究会での学びや訓練を、地域教会の奉仕にどう生かすか、そして豊かに実をむすぶ会員となるかどうか、で評価されるべきです。」マイケル・グリフィス、福永貴恵訳『健忘症のシンデレラ』すぐ書房、1988年、p.142

²⁷ コロサイ 1:6「この福音は、あなたがたが神の恵みを聞き、それをほんとうに理解したとき以来、あなたがたの間でも見られるとおりの勢いをもって、世界中で、実を結び広がり続けています。福音はそのようにしてあなたがたに届いたのです。」